心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
7(2)：1－8，1983

視覚障害者の余暇活動

佐瀬一夫*・中田英雄

視覚障害者の余暇利用を質問紙の方法によって20歳以上，20歳未満，弱視群，盲群，男女別に分析した結果，次のことが明らかとなった。遊びに対して好きかどうかという項目については，弱視との間には有意な差を認めることができなかった。20歳以上の男女は余暇時間をもてあましていないことがわかった。生活の楽しさについては，20歳未満の弱視女子と盲女子，弱視男子と盲男子では，それぞれの群間で有意であった。遊び・楽しみの内容では男子は動的遊び，女子は静的遊びを好む傾向にあり，将来に対する余暇欲求としては旅行が多い。弱視と盲の間には，余暇に対する意識，活動内容に違いがあるのでないかと予想したがかなり類似していることがわかった。類似している理由として，寄宿舎という同一環境内で生活を営んでいること，健常者との交流が少ないこと，レクリエーションの指導・組織が不十分であることを指摘することができる。

はじめに

余暇，そのものの定義はこれまでに多くの研究者によって試みられてきたが，明確ではない。江橋（1978）は余暇について「自由な時間にみずからの満足を得るために自発的に，自由になされる活動」であるとしている。何らかの目標にしたがって管理される教育との関係で倉内（1975）は「余暇と教育とは，本来，水と油の関係にあり……」と述べる。この点に関して，江橋（1978）は「自由さは大切にされなければならないが……(中略)……余暇を過ごし得る技術，態度，意識の形成ということまで，放任してよいということにはならないであろう」と，余暇教育の必要性を述べている。さらに，「余暇時間が増加するにつれて……(中略）……賢明な選択ができるような準備，あるいは，よりよい余暇を過すことができるような条件整備のためには公的対応が必要であるとする考え方もあらわれてきた。ここにレクリエーションという観点が注目されるようになった」とつづけている。レクリエーションについても同様に研究者によってさまざまな見解があるが，まとめてみると，①余暇に営まれる活動　②楽しみとして行われる自発的活動　③生活を営む上で必須の活動は含まない　④その活動それ自体のために行われるもの　⑤個人，社会にとって何らかの意味で価値をもつもの，となる（江橋1963)。

＊昭和57年度研究生
福島県立盲学校

さらに，レクリエーション教育についてはさまざまな関連領域（野外教育，スポーツ教育，レジャー教育，環境教育，野外活動教育）などとの関連も不明確であり，三浦・近藤（1981）はFig. 1.で，その関係を説明し，レクリエーション教育と

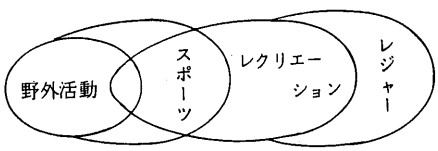

Fig. 1　レクリエーションの関連概念図
（三浦ほか，1982）

云う以上は，教育概念としての必要不可欠な目標・内容・方法・評価などの柱があるべきだと指摘している。レクリエーションはHuizinga(1963)，Caillois（1958）の指摘する本質的な楽しさ，面白さなどを含んでいるので，精神的・身体的・社会的成長が期待できる。このような意味で視覚障害者に対するレクリエーション教育の必要性が考えられる。人間は精神的・身体的・社会的な欲求，関心を持って生きている。そして，自発的に満足できる余暇活動を選択している。視覚障害者も，この人間の基本的欲求，関心は健常者と何ら変わらない。余暇活動の経験を通して，人間はこれらの欲求・関心のある部分を自発的選択によって満足させ，生活を楽しくさせることができる。価値追求的要素を持つレクリエーションには治療的価値をもみつけることができる。そして，

Therapeutic Recreationとして展開できる（O' Morrow 1976,）。このことから，視覚障害者に対しては，身体的，精神的，社会的発達をうながすことのできるTherapeutic Recreationとして発展させる必要があると考える。

以上のことから，本研究では視覚障害者の余暇活動の現状を分析し，Recreation Program作成の基礎資料を得ることを目的とした。

調査方法

1974年6月に全国16の盲学校に調査を依頼した。その結果全盲者284名，弱視者678名から回答が寄せられ，回収率87.5%であった(Table. 1)。

Table 1. 被調査者数

	20歳未満				20歳以上			
	盲		弱視		盲		弱視	
	女	男	女	男	女	男	女	男
人数	45	92	171	238	41	106	84	185

実施学年は高等部と専攻科であった。全盲生徒については担任教師が面接して記人した。集計は20歳以上，20歳未満，弱視群，盲群，男女に分類して行った。

調査内容は21項目実施したが，本研究は6項目について分析した。1. あなたは遊ぶのが好きですか 2. あなたは余暇時間をもてあますことがありますか 3. あなたは現在の生活な楽しいですか 4. あなたは自分から進んで楽しさを求めますか 5. あなたが現在一番良く遊び，楽しむものはどのようなことがありますか 6. あなたはこれからどのような遊び楽しみをしたいと思いますか。

結 果

(1) 遊びに対する意識

Fig. 2は遊びが好きですかに対する回答率を示している。a. b. c.の回答率を各群，男女，年齢別にx^2検定したところ，20歳以上弱視女子では$x^2=16.32$, $df=1$, $P<0.001$, 盲女子$x^2=7.18$, $df=1$, $P<0.01$, 20歳以上弱視男子では$x^2=44.12$, $df=1$, $P<0.001$, 盲男子$x^2=38.34$, $df=1$, $P<0.001$, 20歳未満弱視女子$x^2=22.46$, $df=1$, $P<0.001$, 盲女子$x^2=8.36$, $df=1$, $P<0.005$, 20歳未満弱視男子$x^2=37.68$, $df=1$, $P<0.001$, 盲男子$x^2=25.00$, $df=1$, $P<0.001$の結果を得た。これらのx^2の値はいずれにおいても有意であった。しかし，弱視と盲の群に対するx^2検定では男女，年齢別で有意ではなかった。このことから，遊びが好きかどうかに対する弱視と盲の意識には差がないことがわかった。遊びが好きでもきらいでもない項目において，女子の方が男子よりも，その割合が高い傾向にある。

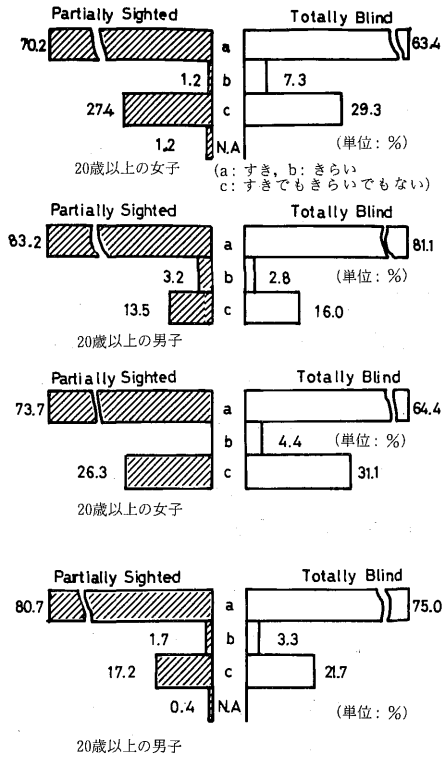

Fig. 2 遊ぶのが好きですかに対する回答率

(2) 余暇時間について

Fig. 3は，余暇時間をもてあますことがありますかに対する回答率である。群別，年齢別，男女別，のx^2検定の結果は20歳以上の弱視女子では$x^2=14.44$, $df=1$, $P<0.001$, 弱視男子$x^2=4.00$, $df=1$, $P<0.05$, 盲女子$x^2=21.45$, $df=1$, $P<0.001$, 盲男子$x^2=4.28$, $df=1$, $P<0.01$, 20歳未満盲男子$x^2=3.84$, $df=1$, $P<0.05$, で有意であった。20歳未満弱視女子，盲女子，弱視男子については有意でなかった。弱視女子と盲女子，弱視男子と盲男子を20歳以上と20歳未満に分けて，x^2検定を行った結果，すべて有意でなかった。

このことから，20歳未満の弱視女子，盲女子，

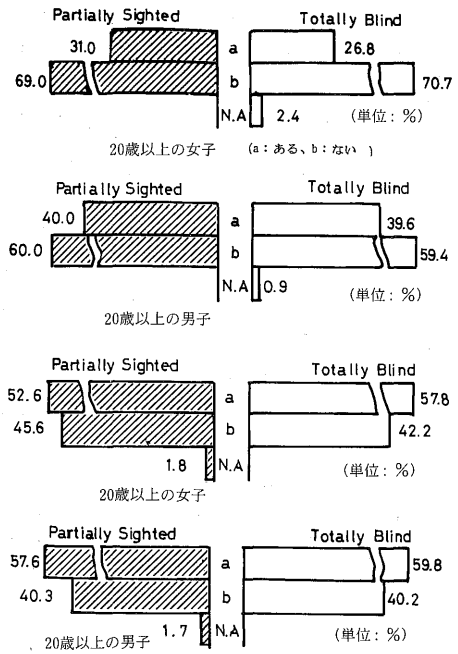

Fig. 3　余暇時間をもてあますことがありますかに対する回答率

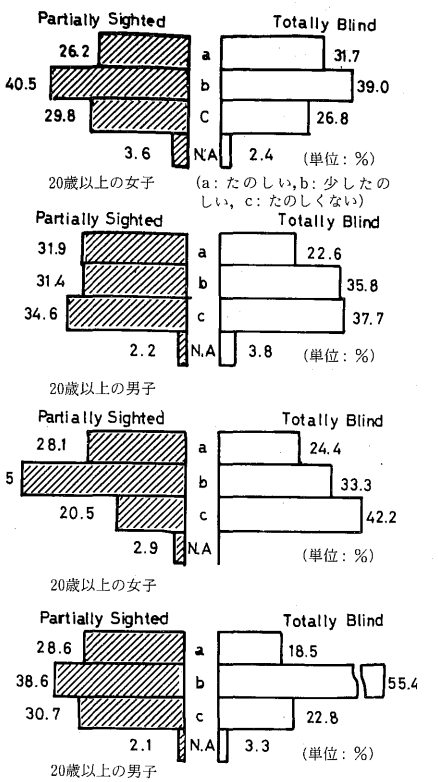

Fig. 4　現在の生活は楽しいですかに対する回答率

弱視男子は余暇時間をもてあましている。また，弱視と盲との間には差がなかった。

(3)　日常生活の楽しさについて

Fig. 4 は現在の生活は楽しいですか，に対する回答率である。それぞれの群別に x^2 検定を行った結果，20 歳以上弱視女子 $x^2=12.67$，$df=1$，$P<0.01$，盲女子 $x^2=4.75$，$df=2$，$P<0.1$，20 歳未満の盲男子 $x^2=24.64$，$df=2$，$P<0.01$ で有意であった。その他は非有意であった。20 歳未満の弱視群と全盲群の間では，女子 $x^2=8.96$，$df=2$，$P<0.05$，男子 $x^2=8.33$，$df=2$，$P<0.05$ で有意であった。20 歳以上の群間では非有意であった。この結果から，日常生活は決して楽しい生活ではないことがわかる。20 歳未満の弱視群と盲群との間では女子（$P<0.05$），男子（$P<0.05$）で有意であり，20 歳以上では弱視と盲の間では類似している。特に，20 歳以上の男女に日常生活が楽しくないとするものが多いことがわかった。

Fig. 5 は自分から進んで楽しさみ求めますか，に対する回答率である。それぞれの群別に x^2 検定

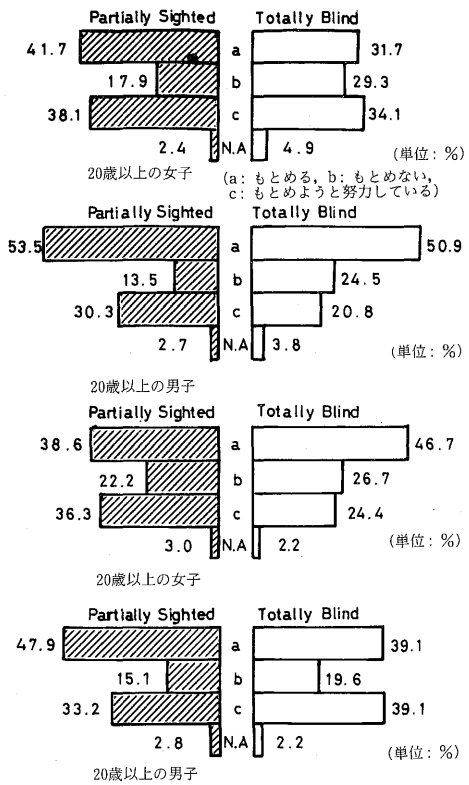

Fig. 5　自分から進んで楽しさを求めますかに対する回答率

を行った結果，20 歳以上弱視女子 $x^2=8.47$, $df=2$, $P<0.02$，弱視男子 $x^2=46.03$, $df=2$, $P<0.001$，盲男子 $x^2=17.87$, $df=2$, $P<0.001$，20 歳未満弱視女子 $x^2=8.29$, $df=2$, $P<0.02$ 弱視男子 $x^2=40.00$, $df=2$, $P<0.001$，盲男子 $x^2=7.20$, $df=2$, $P<0.05$ で有意であった。弱視群と盲群の間では，20 歳以上の男子 $x^2=8.22$, $df=2$, $P<0.02$ で有意であり，その他は非有意であった。この結果，20 歳以上の弱視男子，盲男子に楽しさを求める傾向が強い。20 歳未満については盲女子を除くと，求めようと努力している傾向がうかがわれる。弱視群と盲群の比較では，20 歳以上男子を除くと類似している傾向を示した。

(4) 余暇活動の内容

Fig. 6, 7 は現在一番遊び，楽しむ余暇活動の内容に対する 20 歳以上男女の回答率である。20 歳以上では，盲女子は音楽に関すること (23.1%)，弱視女子はラジオ・テレビ (14.2%)，弱視男子ではスポーツ・ボールゲーム (20.1%)，マージャン・パチンコ (17.8%)，盲男子では音楽に関すること (18.0%) という結果である。20 歳未満の場合では，弱視女子はスポーツ (13.5%)，音楽 (13.5%)，盲女子では音楽 (21.3%)，ラジオ・テレビ (19.7%)，弱視男子はスポーツ (23.5%)，音楽 (16.5%)，盲男子はスポーツ (20.3%)，音楽 (18.70%) という結果である。Table. 2 はこれらのことを動的遊び，静的遊びに回答率をまとめたもので，男子は動的，女子は静的，弱視は動的，全盲は静的遊びを好む傾向にある。

Fig. 8, 9 は，これからどのような余暇活動をしたいかに対する回答率である。各群ともに，40% 程度の無回答があり，これは何をしたらよいかわからないものと考えられる。各群ともに旅行 (20 歳以上弱視女子 20.0%，盲女子 10.4%，弱視男子 12.6%，盲男子 12.9%，20 歳未満弱視女子 12.0%，盲女子 7.4%，弱視男子 10.8%，盲男子 8.9%) に対する欲求が強い。

考　察

余暇活動に積極的に参加しているかどうか判断

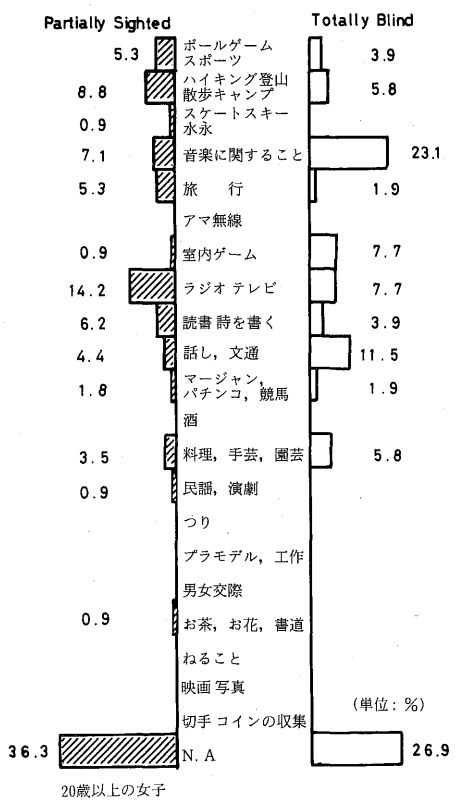

Fig. 6　現在の余暇活動の内容
(20 歳以上の女子)

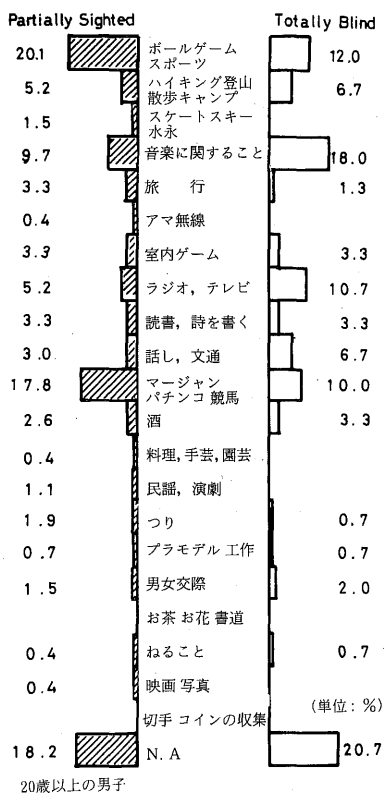

Fig. 7　現在の余暇活動の内容
(20 歳以上の男子)

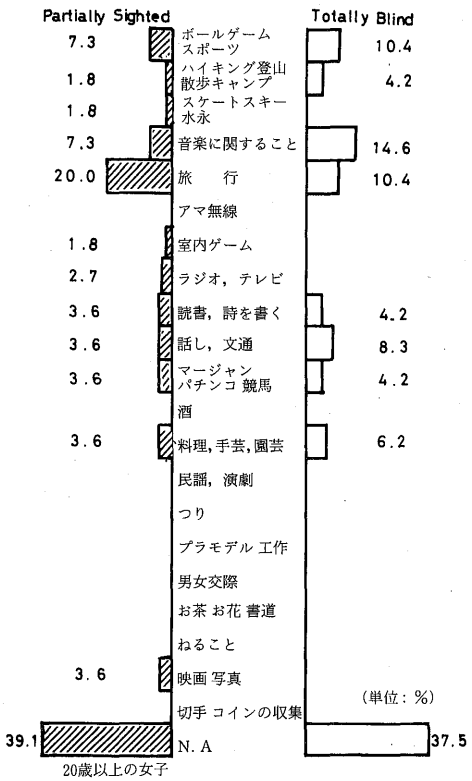

Fig. 8　将来に対する余暇欲求
(20 歳以上の女子)

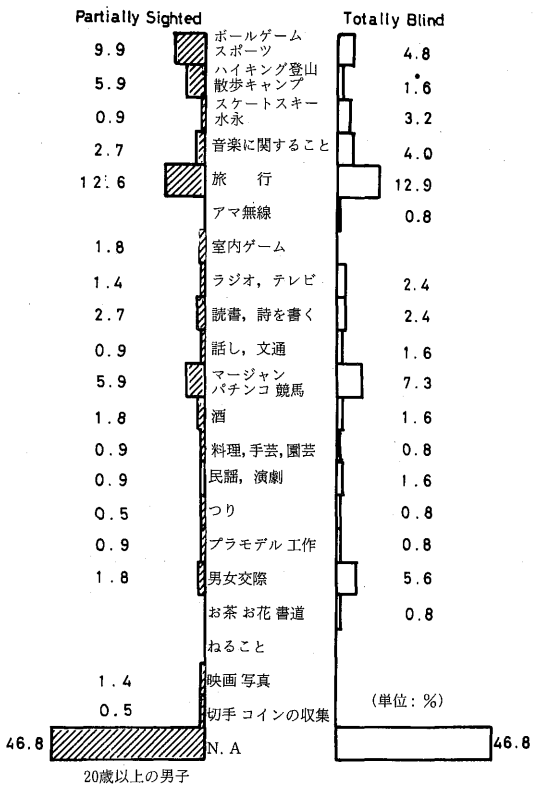

Fig. 9　将来に対する余暇欲求
(20 歳以上の男子)

するために重要な要素として遊びが好きかどうかの項目を設定した。この項目では弱視と盲の間に明確な相違はなく，ほぼ類似の傾向を示した(Fig. 2)。遊びに対する願望は人間にとって基本的な欲求である。しかし，弱視も盲も，男子で15%程度，女子で30%程度が好きでも嫌いでもないと消極的は回答を示した。彼らを消極的にさせている原因のひとつは視覚欠損が考えられる（佐瀬 1979)。彼らには治療的な意味を含んだ Recreation が必要であり，楽しいとか，面白いという感覚を Recreation の経験を積み重ねることによって徐々に変容させることは教育上重要な意義をもつと考えられる。

余暇時間をもてあましている 20 歳未満の弱視と盲男女を日常観察していると，自ら楽しい活動を選択できないでいることがわかる。

視覚欠損が原因となって余暇活動が限定されていることが，その要因と思われるが，余暇欲求が自ら選択できないことがさらに問題ではないかと考える。日常生活の楽しさについては（Fig. 4)，20 歳以上の弱視と盲の男女に楽しくないという割合が高く，楽しい満足した生活をしていないように推察される。小田切（1971）は「楽しさ」を 3 つのカテゴリーに類別化(開放性，感傷性，創意・工夫性）している。この 3 つのカテゴリーと視覚障害者の性格特性を比較してみると，視覚障害者は余りにも自ら楽しさを受け入れない要素が多すぎるように思われる(佐瀬 1979)。楽しさを自ら求めるか(Fig. 5)については，20 歳以上の弱視と盲，男子に楽しさを求める傾向があり，弱視よりも盲の方に楽しさを求めない傾向が強いと思われる。弱視に対してもそうであるが，特に盲に対して，Recreation 経験を通して，人間の基本であるべき，楽しさ，苦しさをもっと，自然の中でのびのびと感知させ，積極的に活動させる必要があると考える。

現在実施させている余暇活動（Fig 6, 7）の割合は Table 2 に示したように男子は動的・女子は静的，弱視は動的，全盲は静的遊びを好む傾向があるが，音楽・テレビ・ラジオだけでなく，教育的

Table 2.　動的遊びと静的遊びの割合

	20歳未満				20歳以上			
	盲		弱視		盲		弱視	
	女	男	女	男	女	男	女	男
スポーツ・ゲーム	1.6	20.3	13.5	23.5	3.9	12.0	5.3	20.1
ハイキング・登山散歩	8.2	10.6	10.0	4.1	5.8	6.7	8.8	5.2
音楽に関すること	21.3	18.7	13.5	16.5	23.1	18.1	7.1	9.7
ラジオ・テレビ	19.7	12.2	13.1	7.0	7.7	10.7	14.2	5.2

（単位：%）

にはさらに動的な遊びや活動を指導する必要がある。江橋（1978）の余暇活動の分類にしたがうと社公的，奉仕的，観光的な活動の割合が低いことがわかる。

将来に対して，どのような余暇活動の欲求を持っているか（Fig. 8, 9）については旅行に対する欲求が強いことがわかる。一方40%程度に回答がなく余暇欲求がないのは問題である。また，動的遊び，スポーツ等に対する欲求の割合も高くない。ここにもRecreation指導の必要性があると考える。将来の余暇行動を予測することについて，原田（1981）は「レジャーから得られる満足の度合が余暇行動を予測する上で最も重要な因子となることを発見した。またある特定の余暇活動によってのみ報われる要求と満足が存在することがTinselyによって確かめられた」と述べる。このことから，視覚障害者のレジャーから得られる満足の度合いの研究は今後の課題である。また，最近の余暇研究が根源的な問題に再び関心が高まっていることも述べる。Fig. 4の20歳未満の男女，Fig. 5の20歳以上の男子を除くと，弱視群と盲群との間には有意な差を認めることができなかった。このことは，弱視と全盲者は余暇活動に対する意識，その内容が類似していることを示している。視覚があるということは何にもまして，日常生活において有利であり，行動範囲も拡大できるはずである。原田（1981）は「Burchは個人が所属する社会集団のタイプがレクリェーション行動に影響を与えることを発見した。この中で異なる社会集団のタイプは異なる経験と欲求をレクリェーション活動に求め，それぞれの集団の成員は同じ程度の経験と欲求をその活動に求めているのではないかという示唆がなされた。」と述べ，さらに，この仮説を発展させ，社会集団による社会化が個人の余暇のライフスタイル形成に重要な役割を果たしていることをつきとめた。このことから，全盲者と弱視者が余暇について考え方等に類似しているのはうなずける。今後は余暇活動と寄宿舎での社会集団との関係の分析が課題である。O'Morrow（1976）はRecreationの経験が個人の行動変容のために使われる時，治療的意味を持つと述べ，個人の成長発達をうながすこと，余暇欲求を自ら果たせるようにすることの2点を特に強調している。運動への参加，野外教育の必要なこと（中田・谷村・佐藤1980），学校の体育の授業は好きなのに，寄宿者に帰ってから屋外運動に参加する機会が少ない（松浦・中野1966）を考えると，余暇欲求を全盲も弱視も，自ら果せるようにするためにはTheraputic Recreation（O'Morrow 1976,）の導入が必要であり，特に寄宿舎生活に導入することがまず第一となる。積極的参加を促すためには指導者によって，綿密なProgramが立案されなければならない。Programingは安全性と効率性の二つの要素が考慮されるべきである（北森ら1982）。また，Fig. 10の関係が重要だとしている。目的・目標についてはFig. 11の関係を

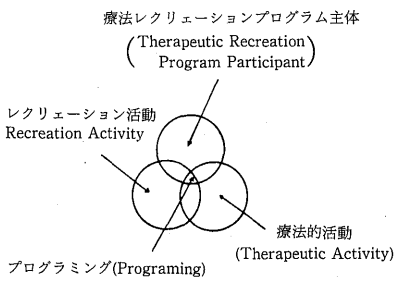

Fig. 10　レクレーション活動，療法的活動，療法的レクリェーション・プログラムの関係
（北森ほか，1982）

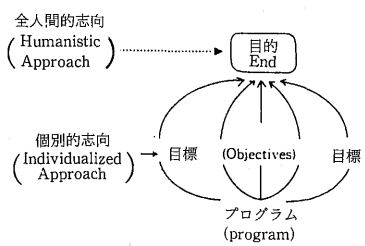

Fig. 11　プログラムの目的と目標との関係
（北森ほか，1982）

指摘している。プログラムを遂行するためには障害者のための Recreation 指導者の育成が急務であると考える。また，Recreation 環境（Pomerey 1964, Case 1966）の整備も必要である。その意味では，東（1975），脇（1975）の視覚障害者の公園計画のような研究が将来とも数多くなされることが望まれる。

今後，これらの諸点に関して，さらに研究を深めると共に，視覚障害者の Recreation，そして Therapeutic Recreation についても検討してみたいと考えている。

要　約

視覚障害者の余暇活動について調査した結果，次のことが明らかとなった。

(イ) 遊びに対して好きかどうかという意識については弱視と全盲との間には有意な差を認めることができなかった。

(ロ) 20 歳以上の男女は余暇時間をもてあましていないことがわかる。20 歳未満の男女は弱視，盲ともに余暇を積極的に利用していない傾向がうかがえる。

(ハ) 生活の楽しさについては，20 歳未満の弱視女子と盲女子，弱視男子と盲男子を比較したところ，それぞれ群間で有意であった。20 歳以上では有意ではなかった。

(ニ) 遊び・楽しみの内容で男子は動的遊び，女子は静的遊びを好む傾向にある。将来に対する欲求として，旅行に対する割合が多い。

(ホ) 弱視と盲とでは，余暇に対する意識，活動内容に違いがあるのでないかと考えたがかなり類似していることがわかった。類似している理由としては，寄宿舎という同一環境内で生活を営んでいること，健常者との交流が少ないこと，Recreation の指導，組織が不十分であることを指摘することができる。

(ヘ) 今後，これらの諸点に関して，さらに研究を深めると共に，視覚障害者の Recreation そして Therapeutic Recreation についても検討してみたいと思う。

謝　辞

この研究に御協力いただきました下記の学校の先生方に深く感謝申し上げます。

青森県立盲，岩手県立盲，秋田県立盲，宮城県立盲，筑波大学附属盲，千葉県立盲，神奈川県立盲，新潟県立盲，三重県立盲，大阪市立盲，福島県立盲。

文　献

1) 東克洋(1975)：盲人公園計画構想に関する基礎研究　都市公園　東京都公園協会 55～59
2) Caillois, R. (1958)：Les Jeux et les Hommes, Editions Gallimard 多田道太郎・塚崎幹夫訳「遊びと人間」講談社
3) Huizinga, J (1963)：Homo Ludens 1938 高橋英夫訳「ホモ・ルーデンス」中央公論社
4) 原田宗彦(1981)：北米における余暇行動研究の動向，レクリエーション研究 9. 35—44
5) 江橋慎四郎(1978)：余暇教育学，垣内出版
6) 江橋慎四郎(1963)：レクリエーション概論，ベースボール・マガジン社，26—34
7) Janet Pomeroy (1964)：Recreation for the Handicapped（城戸正明訳「身体障害児とレクリエーション」），医歯薬出版
8) 倉内史郎(1975)：労働・余暇と教育，第一法規 98
9) 北森義明・鈴木秀雄・宮下桂治・安原照雄(1982)：レクリエーション・プログラミングの開発原理に関する研究，レクリエーション研究 9, 69～77
10) 松浦三代子・中野栄子(1966)：盲人の余暇活動における実態と考察，体育学研究 13 (5)
11) Maurice Case (1966)：Recreation for Blinds adult. Charles C. Thomas
12) 三浦裕・近藤良享(1981)：レクリエーション教育とその関連領域とその概念の明確化に関する研究，レクリエーション研究 8 (39)
13) 中田英雄・谷村裕・佐藤泰正（1980)：視覚障害児の運動機能の発達特性，視覚障害教育・心理研究，2 (1)，1—10
14) O'Morrow, G. S. (1976)：Therapeutic Recreation(今井毅訳「セラピューテックレクリエーション入門」不味堂)
15) 小田切毅一(1971)：レクリエーションの構造論 I，レクリエーション研究 1 (1), 1
16) 佐瀬一夫編(1979)：視覚障害児と遊び，ひまわり出版
17) 脇百太郎(1975)：視覚障害者のための公園施設に関する研究，造園 39 (1)

Summary

Leisure Activities of the Visually Impaired

Kazuo Sase and Hideo Nakata

The present study was to examine the characteristics of daily leisure activities of 962 visually impaired children and adults, which were surveyed by using the questionnaire consisted of 21 items.

The results were as follows:

1) There was no significant difference between the blind and the partially sighted in the awareness for leisure activities.

2) There was tendency to prefer the outdoor games in the male, and the indoor game in the female visually impaired.

3) It was suggested that the recreation programs for the visually impaired shoud be planned and developped in school for the blind.